

## 第3章

# 地球市民学 多文化コミュニケーション学

## 第1節 地球市民学 前期

中 野 和 之・鈴木 克 彦  
岡 村 明・野 田 真 里\*

【抄録】 宗教文化・韓国文化・国際教育の3グループに分かれ、文化比較についての学習を進め、異文化との共生に必要なものや諸問題を考える。3グループの合同授業では、外国人留学生を招いて交流会を持ち、各文化の共通性と異質性を体験的に理解し、多文化コミュニケーションの重要性や必要性に気づかせ、異なる文化に対する感性と寛容性を高める。そして科学的分析力・思考力や地球市民としての倫理観を身につける。

【キーワード】 学び合い 留学生 交流会 コミュニケーション 異文化理解 生活文化 学校文化 宗教文化  
異質性同質性 地球市民

### 1. 目標

- (1) 世界の多様な文化（自国の文化を含め）や文化の背景にあるものの見方・考え方について理解する。
- (2) 疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に必要な感性と寛容な心を高める。
- (3) 異文化間におこる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成する。

カリキュラムの編成方針として、宗教文化、韓国文化、国際教育という軸を設定し、それぞれの各分野の視点から、共通性と異質性を理解、体験し、異なる文化に対する感性と寛容性を高めることを目標にした。

### 2. 学習方法

高校2年生を対象に1クラス40名を3つのグループ

（宗教文化・韓国文化・国際教育）に分け、それぞれのグループを3人の教師（社会・美術・英語）が担当して少人数授業を展開した。但し、3つのグループがそれぞれ単独で授業をするだけではなく、3グループ合同の授業を4回行い、学び合いの場面をつくり、他グループとの知識の共有を進めた。

今年度は、次の2点を重点目標とした。

- (1) 各3つのグループの単独授業を増やし、科学的探究力（解釈・分析・推論・批評）や論理的・多角的・批判的思考力を高めたり、地球市民としての価値・態度を身につけさせたりする授業内容を工夫する。
- (2) 体験的な活動を取り入れ、文化理解を深めたり、多文化コミュニケーションの意義や必要性にせまるようにする。

### 3. 実践内容

#### 授業計画

予定日	宗教文化グループ	韓国文化グループ	国際教育グループ
4月15日（金） 事前アンケート・ 全体説明・希望調査	オリエンテーション グループの説明5分	オリエンテーション グループの説明5分	オリエンテーション グループの説明5分
4月22日（金）	特別授業1 多文化コミュニケーション合同ワークショップ（3グループ合同） *多文化社会をサバイブする（野田先生）コミュニケーション合同ワークショップ 言語・非言語によるコミュニケーションを経験する 体験的異文化教室		
5月6日（金）	ものの考え方1 古代ギリシア思想	韓国の言語・表現 1 ハングルを読もう	フィンランドの教育 1
5月13日（金）	ものの考え方2 キリスト教・イスラム教	韓国の言語・表現 2 ハングルを書こう	フィンランドの教育 2
5月27日（金）	特別授業2 多文化コミュニケーション合同ワークショップ（3グループ合同）留学生との合同交流会・発表会or討論（野田先生）		

\*中部大学准教授

6月3日(金)	ものの考え方3 仏教	韓国の生活文化 1 留学生から学ぶ	世界の教育1 留学生から学ぶ
6月10日(金)	ものの考え方4 ヨーロッパ哲学	韓国の生活文化 2 日・韓の生活の違い	世界の教育2 留学生から学ぶ
6月17日(金)	ものの考え方5 日本人と仏教	韓国の生活文化 3 食文化の違い	世界の教育3 調査・研究
7月1日(金)	特別授業3 「文化とコミュニケーション」(高井先生)(3グループ合同)		
7月8日(金)	ものの考え方6 日本人の宗教観	韓国の宗教文化 日韓儒教比較	世界の教育4 調査・研究
7月15日(金)	まとめ +夏休み探究課題の説明	まとめ +夏休み探究課題の説明	まとめ +夏休み探究課題の説明
9月2日(金)	夏休み探究課題「受け入れる 溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れる 溶け込む」の発表	夏休み探究課題「受け入れる 溶け込む」の発表
9月9日(金)	発信型コミュニケーション 合同学習の準備	発信型コミュニケーション 合同学習の準備	発信型コミュニケーション 合同学習の準備
9月30日(金) 3グループ合同	発信型コミュニケーション合同学習(留学生とともに) 「価値観の異なる人々とのコミュニケーション力を磨く」(高井先生)		
10月11日(火) 締切り	事後アンケートの宿題2枚		

#### 4. 実践内容

##### 1) 宗教文化

①テーマ:「哲学、宗教を通して見た世界」

②ねらい: 現在、グローバル化されている世界の中で、それぞれの民族や人種間で起きる文化摩擦が問題となっている。もともと言語の構造が違う人々が同じ考え方に立って生きてはいない。また、同じ日本人同士でも意志の疎通は難しく、人間関係に根ざしたストレスを抱えている人々が多く存在している。

こうした状況の中、異文化を理解しようとしても無理がある。それよりも異文化との違いをはっきりと認識する方が取り組み易い。「哲学、宗教を通して見た世界」では、世界の源流思想と言われる古代ギリシア世界からキリスト教、イスラム教、仏教を中心にして、それぞれの考え方の違いを学習した。基本的には高校「倫理」の学習を取り入れながら進めた。附属学校だから出来るというような授業にはしたくないという思いから、比較的授業に即しながら発展的に授業を進めた。

③授業方法: 机をコの字型に配置し、教師からの発問に答えていくという形式で授業を進めた。それぞれテーマを設定し、その概要を短く説明し、その考え方や理解の仕方の特徴を自分に照らし合わせて考えるようにした。全ての生徒に発言を求め、お互いに考えている内容や考え方の違いに気づくよう発問を重ねていった。

④成果と課題: 以下の事前事後アンケートを行った。

1) コミュニケーションを自らとろうと思う。

2) コミュニケーション力があると思う。

3) 世界に多様な文化があることは大切である。

4) 世界の多様な文化を受け入れることができる。

5) 世界の多様な文化を持つ人々とコミュニケーションすることができる。

上の5つの設問に対して、5: とても思う 4: そう思う 3: どちらでもない 2: あまりそう思わない 1: そう思わない、の5段階の選択形式で行った。

事前	事後	事前	事後	事前	事後
1) 3.5	3.8	2) 2.6	2.6	3) 4.2	4.4
4) 3.6	3.8	5) 2.9	2.9		

アンケート数値から見ると、1)、3)、4)の項目が0.2~0.3増加しており、多文化に対する意欲、理解が深まったと考えられる。ただ、コミュニケーション能力に関しては数値が変わっていない。これは個人の性向や能力に関わる項目であり、講座の性格にもよるものと考えられる。

多文化コミュニケーションについて自分の考えを書かせた自由記述形式では、「多文化コミュニケーションが何かよくわからないけれど、様々な文化を持った人が関わりあうことだと思う。」(女子)という事前アンケートの記述が事後では「多文化コミュニケーションは大切だと思う。文化が異なっていると、確かに身構えるところはあるし、受け入れられないような行為もある。だから、多様な文化があれば、様々な考え方もあるけれど、その考え方をすべて受け入れる必要はないと思う。」と漠然としたものから、具体的に経験

することによる見解へと変化してきている。男子では、「異文化を取り入れるということは、ある意味恥らいを乗り越えることなのかもしれない。マナーが悪いと思うのかも知れない。しかしながらコミュニケーションにより、由来を探っていけば案外納得できるものなのだと思う。」というあいまいな表現だったのが、「今回、色々な宗教観から様々な国の価値観を知ることができた。神を重んじたりそうでなかったり。それを受けて僕は、国による文化の違いを受け入れるのは大変だと思った。しかし、それを乗り越えて文化を受け入れれば、多様性からの世界観の広がりは素晴らしいものだと思う。」という、より明確な記述となっている。外国人との具体的な経験と考え方の理解が進んだ結果がうかがえる。一人一人に考え、自分の意見を発表させる授業によって、他人の意見を聞き、自分の考えをまとめていく機会が持てたものと思う。今後の課題は、テーマに系統性を持たせて、継続的に考えていくことである。たとえば「人間」や「存在」など古代からどういった考え方で扱われてきたかとか、東西文明による考え方の差異など包括的な授業展開を行う必要がある。

## 2) 韓国文化

### ①授業内容例

#### ○韓国の言語・表現2 (5月13日実施)

導入部は、ハングル五十音表を見ながら、ハングルで自分の名前を書く練習をおこなった。その際、①韓国語の単語の一字目は濁音にならない。②単語二番目以降の激音の使い方。③長音はほとんど使わない。④「ん」はパッチム「ㄴ」を使う。⑤「っ」はパッチム「ㅍ」を使う。日本語の発音をハングルで表記する時に注意する①～⑤の法則を取り上げ、日本語と韓国語の発音の違いを考えさせた。

次に、ことわざの日韓比較をおこない、ことわざに表れる国民性の違いについて考えさせた。「言うは味」と「言わぬが花」の比較では、言葉を使っただけで言うことに重きを置く韓国人と、言葉を使わず以心伝心に重きを置く日本人の違いから、コミュニケーションする上で誤解しがちな事例を考えさせた。その他、韓国の子供がことわざを習得するのはコンピュータのキーボード入力練習によること、韓国では猫は忌み嫌われる対象であることなどのことわざを通しての文化比較もおこなった。

#### ○日韓の生活文化の比較2 (6月10日実施)

韓国からの留学生の金ミンジさんを招いて、スーブ料理「サムゲタン」を食べる実演を見ながら、日本の食事マナーとの違いを気づかせ、食文化の違い

を実感させた。たてひぎで食べること、スプーンでご飯をたべること、お茶碗は持たないこと、鍋料理や盛り合わせの料理を取る時、箸・直スプーンOKであること、年長者の前でのマナー、食べ残しについてなど日本の食事の習慣との違いを考えさせた。その他、おかずの多さ、皆で食べる習慣、混ぜて味わう韓国VS素材の持ち味を楽しむ日本、唐辛子、浄水器、タンパク源、器の色や形状等の日韓比較を行った。

#### ○日本の宗教は何か (7月15日実施)

日本の宗教について考える前に、日本の宗教の源流となる自然崇拝について考えさせた。導入部では線が刻まれている日本の斧と何の装飾もない西洋の斧に着目させ、線が何を意味しているのか考えさせた。次に表の三本の線がお酒(ミキ)、裏の四本の線が地・水・火・風によって採れる五穀の意味があることを解き明かし、山に入って木を切る前に木の根元に置き、手を合わせて、山の神への感謝の気持ちを表す風習があることを理解させた。日本人は自然に対する畏敬の念があり、自然の恩恵を受けて人間が生かされており、自然をぞんざいに扱うことを戒め、自然を大切に共生する気持ちが脈々と受け継がれていることに気づかせた。次に清明心(きよきあかき心)に触れ、自然のように清らかで、共同体に対して隠しだてしない心、私欲を排し穢れない心の状態を尊ぶ倫理観を形成してきたことに触れた。最後に神道・仏教・儒教・キリスト教・道教を、それぞれに関係する行事や風習と結び付けるクイズを行い、我々の生活にいかに関与しているかを気づかせ、日本が様々な宗教の教えの都合の良い部分を取り入れ融合させてきたことを理解させた。

### ②成果と課題

言語では、ハングルで自分の名前を書くことを通して、語頭に濁音を置かない、韓国語では長音「ー」の発音習慣がほとんどない、パッチム「ㄴ」・「ㅍ」を使い「ん」や「っ」の発音を表すことなど日本語発音のハングルでの表示法則を理解すると同時に韓国語の発音の特徴をつかませることができた。しかし、日本人が苦手な音節の最後の子音(終声)の発音や激音・濃音の使い分けの理解に関しては、説明により多くの時間を要するため、発音習慣の違いを深めるには至らなかった。発音習慣の違いによる誤解を生まないように、お互いの言語の発音の得手・不得手をしっかりと認め合い、発音の特徴を寛容に受け入れる気持ちを高めていく必要があると思われる。

生活文化の比較としては、韓国料理の食べ方の実演を通して、日韓の食文化の違いを考えさせた。立

て膝による座り方、お茶碗を持たずにスプーンでご飯を食べること、箸でとるなど、韓国の正しい作法は日本では行儀が悪く受け取られることを理解させた。同時に、日本の食事作法が外国では通用しない場合があることに気づかせるにはたいへん有効であった。しかし、韓国でも時代とともに食事作法が変化し、満腹感を表す食べ残しの作法は生ごみを減らすために行われなくなってきたことや、年長者が箸を取るまで待つ習慣は薄れてきたこと、ひとりで食事をする場合もあることなど、韓国の若い世代の中では食事作法については比較的柔軟に対応している事実も分かった。金ミンジさんに食事マナーの実情を聞き、改めて今現在の韓国文化の実態をふまえた授業をしていく必要を感じた。

今年は昨年度の反省として、日本人の生活規範や倫理観の根底にある日本の宗教についての理解を深めさせる授業を行った。生徒にとって、自分たちの宗教は何かということを授業で扱うのはたいへん難しいことであるので、なるべく身近な生活の中での宗教の影響が表れている事例を取り上げて理解させるようにした。自然崇拝の表れた事例として、斧についた線の飾りを取り上げ、自然への畏れの感情・自然への感謝や共生していこうとする気持ちを理解させた。斧に限らず我々が古くから使用している道具や道具の使い方の中に、日本人の自然観の痕跡が残されている場合も少なくない。道具に表れる日本人の自然観を調査する課題を生徒に与え発表させる授業を工夫していきたい。時間が許されるなら、槍・鎧・ちょうなや石のみ・せり矢等の道具を実際に使って、木や石などの自然材料を加工させる経験を通して、日本の自然観を体感させる授業も試みてみたい。また、現代の日本文化を形成している仏教・道教・神道・儒教・キリスト教・武士道等の宗教や思想の影響についても、短時間で生徒に誤解なく教えていく必要がある。そのためには、倫理社会の教師との連携や共同授業を進めていく必要を感じた。

### 3) 国際教育

#### ①授業計画

目 標：PISAで世界一となった教育先進国フィンランドやOECD加盟国あるいは発展途上国の学校教育と日本の学校教育をさまざまな視点で比較することで、生徒個人がよりよく学ぶための環境作りを考え、社会や学校に要求できるような知識を身につける。

内 容：先進国、新興国、途上国の学校についてクラスサイズ、生徒の個人的ニーズへの対応、教科の多様性、教員の質・人数、

施設・設備教育目標などから文化・宗教・国民性・社会体制・経済状況まで幅広い視点を持ち、文献で調べたり、留学生や研究者から聞いたりして、まとめ、自分が今受けている教育の改善の提言をする。

- 方 法 1)「フィンランドの教育」の概要を知り、日本の場合と比較する。  
2) 名大留学生招待授業、研究者招待授業を聞いて、日本の教育と比較する。  
3) 文献研究、インターネット検索を通じて、世界の学校教育が学習者の学習をいかに促進しているかどうかを調べる。

計 画：第1～2回：フィンランドの学校教育  
by鈴木克彦

第3～4回：OECD加盟国（イギリス、アメリカ）、アジア（中国、韓国）・アフリカ・南米やイスラム圏の学校教育（招待留学生または研究者）

第5～6回：議論とレポート：・学ぶ者の視点から私達の学校に足りない点・充足されている点を知り、名大附属学校（日本の学校）へのグループ提言をまとめる。

夏休みの課題：「世界の学校」副題は各自で考える

- ・多様な視点で調べる。日本国内の国際学校やIB学校なども対象とする。
- ・できればフィールドワークを行うことをよしとする。
- ・名大附属学校がこうなればよいという意見をもてるように。

第7回 プレゼンテーション（全員）各クラス2名選出

#### ②授業実践

フィンランドの学校教育：筆者はフィンランドの学校を視察した経験がある。視察日誌をもとにフィンランドの学校教育が個人の教育ニーズにシステムとしていかに対応しているかを示した。一般教育だけでなく特別支援教育においても、個別の障害に応

じた個人ごとの教育プログラムが立てられることなど、個人に寄り添う教育は、日本での教育とは大きく違うと生徒は感じたようだ。テストに対する考え方は、フィンランドでは自分のために学ぶのであって、テストのために学ぶのではない。このことに関心をもったある生徒は、夏休みの課題研究で、「何のために学ぶのか」というタイトルでフィンランドとサッチャー政権下での競争原理に基づく教育に転じたイギリスについてのレポートを通じて、テストの効用について見事な分析を行った。

中国、ラオスの学校教育：中国から李子さん、ラオスからラノイさんから国際開発科の出前授業でそれぞれの国の中学や高校の教育について写真・資料のOHP提示による話を伺った。中国では全寮制で1日8時間授業、さらに前後に自習時間と土日も授業があるなど猛烈に勉強しなくてはならない。これは一部の学校だけではなく、中国全体の学校でのことである。信じられないと言う生徒の感想であり、なかには日本に生まれてよかったなどと述べる生徒もいる。生徒の中国理解は途上国ではなく、先進国というイメージである。

ラノイさんの話を聞いて生徒が感想に書いたことは、ラオスには義務教育段階で学校に行けない子が多いことや教科書不足で先生しか教科書を持っていないこともよくあることで、先生の努力でそれを補おうとしていること、またラノイさん自身の家庭が貧しく、高校へ通いながら夜8時から朝3時まで毎日働いて、家族を支えながら生きてきたことなどが生徒の印象に残った話として挙げられている。恵まれた環境で学校に通っていることを感じたと同時に何のために学んでいるのかを深く考える必要性に言及する生徒もいる。

期せずして先進国（フィンランド）、新興国（中国）、途上国（ラオス）の3つの経済レベルの国々を扱うことになった。夏休みの課題を提示する前に、これまでの振り返りの話し合いをもった際に教育と経済と密接な関係について議論する場面があった。

夏休みの課題研究：各クラスの夏休みの課題研究のタイトルを下に列挙する。

A組：「中国の教育について」「フィジーの教育」「日本と中国の教育の違い」「ドイツ」「日本の江戸時代の教育」「世界と日本の英語教育」「フィンランドと日本」「アメリカの教育」「イギリスの教育」「フィンランド、アメリカ、フランス、イギリスの教育制度」「日本国内の外国人学校」

B組：「海外の学校と留学」「ドイツの教育—マイスター—」「フィンランドとイギリスの教育」

「ニュージーランド」「フィンランドの教育状況」「発展途上国の教育事情」「イギリスの教育」「デンマークの教育」「世界の幼児教育」「シンガポール」「フランスの教育制度」

C組：「オーストラリアの教育」「教科書から世界の教育を見る」「PISAから見た日本の教育」「世界の中心アメリカの教育」「日本の学校教育の問題点」「アーミッシュの教育」「ロシアの教育」「私の考える日本の教育の特徴と改善点」「教育の多様性—中国の教育制度—」「シンガポールの教育」「全国学力テストから日本の教育を考える」「イギリスの教育」

### ③まとめ

夏休みの課題研究の一覧から分かるように、生徒の関心は多岐に及ぶものとなった。研究の内容はこれまでの授業（フィンランド、中国、ラオスの教育についての知見）に触発されたものと言える。次の4つの項目に分類される。

- ①復習的な内容を文献やインターネットで確認したり、さらに深く調べたりしたもの（6点）
- ②他の国の教育について調べたもの（17点）
- ③日本の教育について観点を決めて見直したもの（7点）
- ④観点を決めて包括的に世界の教育を見たもの（7点）

また、調べる「観点」としてタイトルに盛り込まれたキーワード（または概念）は「教育制度」「教科書」「PISA」「幼児教育」「学力テスト」「（経済レベルと教育の関係）」「留学」がある。

目標で掲げたように、世界の学校教育を知ること、当たり前と受け取っていた自らを取り巻く教育環境について、この授業が多くを考えるきっかけや改善の可能性への気づきを与えることができた。狭い視野で見ていた日常の教育活動を、世界というより大きな視野、あるいは別の観点到置きかえて見ることで、自分たちの教育をよりよいものにしていく可能性を見いだす契機となったと言える。

### ④今後に向けて

昨年、私は英語学習のメタ認知知識の拡大、あるいは質を高めることを試みた。それによって彼らの英語学習の質を高めることにある程度の成果を得た。しかし多文化あるいは国際理解の観点から授業を構成できたかと言えば、英語という教科に傾きすぎて、異方向性を同僚より指摘を受けた。本年度はどうか。教育の国際比較を通じて、高校生の学習意識改革をねらった点で昨年の「メタ認知知識の拡大・高質化」を引き継ぐものがあるものの、フィン

ランド、中国、ラオスを比較考察することで教育は文化、経済、国民感情などを反映するものであることを見事に言い当てた生徒の意見があるように多文化理解教育の目的を達成できたのではないか。

フィンランドは私が一昨年度教育視察したときの資料をまとめたもので、かなり詳細な資料を生徒に渡し、解説した。中国とラオスは名古屋大学国際開発科の授業デリバリーを利用して、李子さんとラノイさんに来てもらった。生徒に教えるのは初めてで、緊張したようすだったが、パソコンなど準備がよくできていた上に、いっしょに来てくれた国際開発の担当者の助言が適切で、生徒にはわかりやすく印象的な授業であった。

## 5. 前期SLPⅡ「多文化コミュニケーション」(前期)の授業評価

鈴木 克彦

## 1) SLPⅡ(前期)の授業目標と授業評価

前期SLP終了時に生徒にSLPⅡに共通の授業評価を質問紙法で行った。質問は下の8個の授業目標(表1)を生徒が達成することができるという観点から質問項目から成り、5件法で回答するものである。

表1 SLPⅡの授業目標

- |   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| ① | 教科横断的・今日的な課題について考える機会となったか。         |
| ② | 大きな課題を考えるために、既有知識をつなげることができたか。      |
| ③ | 課題について論理的・多元的・長期的に考えることができたか。       |
| ④ | 疑似科学にだまされない判断力がつき、常識が常識でないことに気づいたか。 |
| ⑤ | データの分析の方法を身につけたか。                   |
| ⑥ | 自らの考えを他者に伝えたか。                      |
| ⑦ | 他者と協同して考えたか。                        |
| ⑧ | 本質的な深い理解。                           |

これらの質問はSLP担当研究部が考えたものであるが、8つの目標が38個の質問項目にすべてが反映されているものではない。また授業評価のためには生徒の自己の学習観の形成への寄与や、授業形態の生徒の評価、自己確立などの精神面への影響など別な観点が必要であ

る。そのため質問項目を授業評価に即したカテゴリーに分類し直す必要がある。表2に全質問項目とSLPⅡの教育目標、授業評価のための新たなカテゴリー分けの対応を一覧として表にまとめたものである。また、各質問に対する生徒の評価点とSDを記した。

表2 全質問項目

No.	質問項目	平均値 SD	目標	授業評価
1	SLPⅡでは、様々な視点からの知識が得られると思う。	4.16 .82	①③	授業観
2	SLPⅡでは、学校外の講師の授業を通して専門的な知識が得られると思う。	4.03 .94	①③	授業観
3	SLPⅡでは、様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られると思う。	3.73 .87	①③	授業観
4	SLPⅡで扱ったような“答のにくい問題”について学習することは大切である。	4.14 .94	①	自己学習力
5	SLPⅡで学習したような問題に対して自分の意見や、考えを持っている。	3.81 .92	③	自己確立
6	SLPⅡは、今までもっていた知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つ機会となった。	3.71 .92	②⑥	自己確立
7	1つの大きなテーマについて3つのグループの視点から多元的に考えることができたと思う。	3.55 1.07	③	自己学習力
8	自分は、1つの課題について深く分析したり、幅広く考えてまとめた力を持っている。	3.09 .96	①③	自己学習力
9	SLPⅡの授業を通して、自分の教養を深く広くすることができたと思う。	3.82 .87	①③	自己学習力
10	SLPⅡの学習がこれからの自分の進路選択や自分の生き方を考える助けとなると思う。	3.36 1.03	⑧	自己確立
11	SLPⅡで学んだことを現実の生活や社会で応用し役立てられると思う。	3.45 .97	①	自己確立
12	SLPⅡで学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用できると思う。	3.60 .96	①	自己学習力

13	SLPⅡで学習した内容に関する問題点を自分で見つける力がついたと思う。	3.41 .84	⑥	自己学習力
14	SLPⅡの学習では知識を得るのみでなく多様な経験することができるので、関連する事柄への関心が高くなると思う。	3.79 1.00	①②	授業観
15	SLPⅡで学習したことに関連する既存の教科学習の内容についても深く学ぶきっかけになった。	3.04 1.04	①②	自己学習力
16	SLPⅡでは、少人数で学習したために多様な学習活動ができると思う。	3.85 .96		授業観
17	SLPⅡの学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。	2.26 .91	①③	自己学習力
18	3つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながると思う。	3.83 .95		授業観
19	SLPⅡで1つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例:社会、理科、数学等)を意欲的に取り組むことにつながると思う。	2.91 .96	①②	自己学習力
20	SLPⅡで学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。	2.21 .94	①②	SLP否定
21	SLPⅡは週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。	3.29 1.11		SLP肯定
22	SLPⅡを週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。	2.46 1.03		SLP否定
23	総合人間科よりSLPⅡの方が、学習の目的がはっきりしていると思う。	3.06 .90		SLP肯定
24	SLPⅡより、総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。	3.42 .92	⑧	SLP肯定
25	SLPⅡでは、総合人間科以外の他教科より、友人や教員などとともに“人と学びあう”機会が多いと思う。	3.80 .92	⑦	SLP肯定
26	日常生活の中には、疑似科学(似非科学)が多く氾濫していると思う。	3.53 .87	④	科学的思考
27	自分は、疑似科学にだまされないだけの判断力を持っていると思う。	2.88 .87	④	科学的思考
28	日常生活の中の科学や問題点については、単なる雰囲気や感情ではなく、論理的に考えることが大事だと思う。	3.87 .91	③	科学的思考
29	自分は、多くのデータや資料から、大切な部分を抜き出して分析することができる。	3.31 .90	⑤	科学的思考
30	SLPⅡの授業を通して、今まで当たり前と思っていたことが当たり前ではないことに気づいた。	3.72 .98	④	科学的思考
31	自分の意見を他の人に伝えることは大切だと思う。	4.26 .96	⑥⑦	コミュニケーション
32	普段、今日的な社会問題について他の人と意見交換している。	2.94 1.06	⑥⑦	コミュニケーション
33	現代の社会問題について、他の人と意見を交換しながら考えることができる。	3.37 .96	⑥⑦	コミュニケーション
34	自分は、他の人の意見を聞いて、論点を整理することができる。	3.44 .88	⑥⑦	コミュニケーション
35	他の人の考えを聞くことは、自分の理解を深めることの助けになると思う。	4.19 .96	⑥⑦	コミュニケーション
36	自分は、他の人に自分の意見を正確に伝えることができる。	3.18 1.01	⑥⑦	コミュニケーション
37	SLPⅡで、他の人の意見を聞いて、自分の考えが足りないと思う場面があった。	4.10 .92	⑥⑦	コミュニケーション
38	大きな問題を考えるときには、他の人と協力して考える方がよいと思う。	4.12 .94	⑥⑦	コミュニケーション



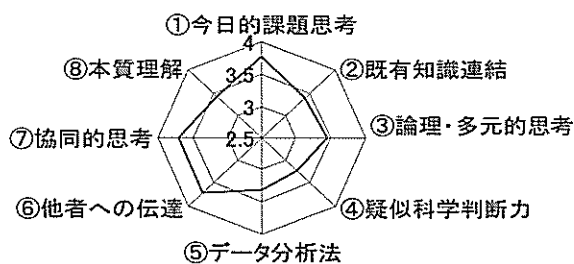
高評価項目（4.00以上）は1、2、4、31、37、38である。このことから目標①③の大きい現代的課題について考えさせることと自分の意見を述べ、また目標⑥⑦の他者の意見も聞き入れるなど双方向的なコミュニケーション力を身に付けさせることに影響を与えたと言える。

低評価項目（2.00未満）はないが、3.00未満まで拡大解釈すれば、17、19、20、22、27、32がある。17、19は目標①②③に関することだが、SLPが他教科の学び方を変えるような新たな学びの方法であるということにはならなかったようだ。20、22はSLPを否定する内容で、逆転項目と言える質問である。他の一般教科に置き換えるという考えを否定し、SLPの存在意義を認める者が多いと言える。27については疑似科学をSLP IIでは明示的には扱っていないので、自信をもって判断できると思えないのであろう。32はSLP II前期で扱う内容が異文化コミュニケーションなので、社会問題というほどの認識はないのではないであろう。

以上の内容を踏まえて、教育目標①～⑧と各質問に対する生徒評価を照らし合わせた場合の生徒の評価得点を平均しレーダーチャートで示したものが図1である。

これから今日的課題について考えるきっかけになったことや、協同的思考や他者への伝達力の育成に役に立ったと思うが、一方既有知識を連結する力や疑似科学を判断する力、データを分析力には学習でのコミュニケーション力育成の目標ほどには達成できていないと評価している。

図1 授業目標と照らし合わせた場合の生徒評価



次に生徒がこの授業を通じてどういう学習能力を身に着けたと思っているのか、また授業に対する満足度など授業評価を計測するために、全質問項目を授業目標とは別に表2「授業評価」の欄に示したように「授業観」「自己学習力」「自己確立」「科学的思考」「コミュニケーション力」「SLP肯定」（質問20、22は逆転項目として処理した）の6つのジャンルに分類しなおしてデータを捕らえ直した。これは前述の教育目標達成度を測るものと共通する部分が多いが、ここにはさらに（大学の教師以外の）3人の授業者の自己評価を加えて、教える側と

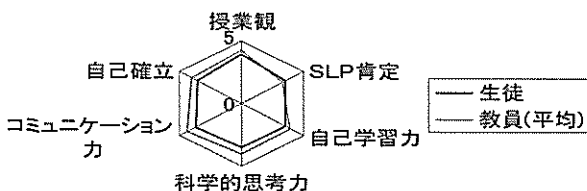
学習者の授業評価の対比を次のように行った。

質問ごとの平均値をカテゴリーごとにまとめて平均値を出した。また同一の質問項目を使い、担当教員に授業の自己評価をしてもらった。教員の側の授業評価を数値でしてもらい、これも同様にカテゴリーごとに平均値を出した。生徒と教員の両者のデータを図2のようにレーダーチャートにまとめた。これにより生徒と教員間の評価のずれが分かり、今後の授業課題が明らかになる。

これから生徒は授業をたいへん好意的に受け入れているが、SLPを過剰に肯定はしない。コミュニケーション力や自己確立には役に立つと思うが、自己学習力や科学的思考力の育成にはそれほどでもない。

また教員は生徒が身につけた自己学習力、科学的思考力、コミュニケーション力、自己確立に生徒より期待感が大きい。裏返せば自信をもってそれらの学習力を伸ばせたと思っている。授業全般の満足度は生徒、教師ともにほぼ高い値で一致した。SLPの肯定感は教師がやや下回る。

図2 生徒の授業評価と教師の自己評価



## 2) 同一データを使っての探索的因子分析

SLP II（前期）に対する生徒の集団としての特性を知るために、同じデータを使って探索的因子分析を行った。SLP II前期に関する質問項目に対して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。結果を表3に示す。固有値の変化のようすから4因子を採用した。第1因子は項目4、35、31、1、28、37、12、20、10、7、2、9、16、5、26、18、25、22に負荷量が高いことから、「問題の意識化因子」、第2因子は項目30、7、14、15、10、19、3、11、6に負荷量が高いことから「自己関係性因子」、第3因子は項目33、34、8、29、27、36、32、13に負荷量が高いので「コミュニケーション志向因子」、さらに第4因子は項目38、24、21、23に負荷量が高いことから「協同的分析志向因子」と名付けた。

累積寄与率が46.7%と低いため、参考までということであるが、授業で提示された異文化コミュニケーションに関する問題の提示を受け、自分との関係性を考えながら学習を進め、自らの考えをグループワークなどで述べことは重要であると考え、同時に他者の考えにも耳を傾け、自分の考えを形成する学習を進めてきたと推測できる。

表3 回転後の因子行列

項 目	因 子			
	1	2	3	4
4	.777	.147	.145	.072
35	.727	.031	.199	.403
31	.726	.154	.177	.423
1	.675	.446	.200	.068
28	.653	.041	.252	.220
37	.610	.278	-.069	.079
12	.603	.317	.297	-.210
20	-.596	.054	.109	.125
17	-.590	-.441	-.175	.097
2	.561	.502	.065	.278
9	.543	.493	.188	-.027
16	.528	.402	.072	.092
5	.480	.116	.456	-.014
26	.480	-.043	.125	-.230
18	.459	.396	.096	.030
25	.459	.225	.079	-.064
22	-.368	-.091	.146	.250
30	.234	.697	-.046	.203
7	.121	.621	.216	.181
14	.456	.614	.119	.144
15	-.029	.590	.229	-.085
10	.230	.543	.045	-.030
19	.110	-.526	-.183	.148
3	.427	.497	.181	-.021
11	.225	.494	.208	-.053
6	.446	.457	.219	-.111
33	.125	.049	.774	-.009
34	.153	.078	.739	.097
8	.026	.289	.628	-.118
29	.154	.061	.621	.046
27	.245	.122	.562	-.440
36	-.013	.132	.546	-.121
32	.004	.172	.496	-.093
13	.154	.379	.451	-.046
38	.380	.336	.087	.563
24	.062	.106	-.108	.519
21	.059	-.067	-.136	.481
23	.148	.063	.021	-.345
累積寄与率%	28.9	37.2	42.4	46.7

### 3) 多文化コミュニケーション」事前・事後の質問紙調査結果

S L P II（前期）を行った最初（4月15日）の授業と

最後（9月30日）の授業に、この授業に関して質問紙（5件法）による調査を実施した（対象：高校2年生115名）。質問の内容は表1に示される5つの項目である。これらはコミュニケーションに対する態度や有能感、多様な文化を受け入れることへの価値観、態度などを尋ねるものである。調査集計後、t検定（両側検定）を行い、授業前・後でどのような変化があったかを分析した。その結果は表2に示されるものである。表2では各質問平均と分散、質問ごとのt値、P値を表した。

表1 質問項目

質 問 内 容
質問1 コミュニケーションを自らと思う。
質問2 コミュニケーション力があると思う。
質問3 世界に多様な文化があることは大切である。
質問4 世界の多様な文化を受け入れることができる。
質問5 世界の多様な文化を持つ人々とコミュニケーションすることができる。

表2 質問紙による事前・事後調査の結果(n=115, df=114)

	質問1		質問2		質問3		質問4		質問5	
	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前
平均	3.94	3.66	2.91	2.81	4.52	4.42	4.01	3.77	3.41	3.00
分散	.78	.90	1.06	.95	.34	.37	.59	.64	.91	.86
t 値	3.89		1.59		1.83		3.40		5.11	
P値	.00		.12		.07		.00		.00	
有意水準	1 %		有意差なし		有意傾向		1 %		1 %	

質問1、4、5で有意水準1%をクリアしており、質問3では有意傾向を示している。質問2では有意差はなかった。これらのことから、「多文化コミュニケーション」の授業を受けて、コミュニケーションを自らと思うとする積極的な態度が見られるようになり、世界のさまざまな文化圏の人々を受け入れ、コミュニケーションをとろうとする意志が育ってきたと言えるが、自らのコミュニケーション能力には自信がないか、あるいは経験がないことからコミュニケーションの取り方がわからないなど実際のコミュニケーションには不安があることが推測される。

また記述部分について見ると、多くの生徒は多文化、異文化理解の重要性を改めて授業を通じて認識するようになったと述べている。その中に実際にコミュニケーションが自分にできるだろうかと言う不安を示す記述があったので、引用する。「コミュニケーションをとることは重要だと思います。だからもう少しコミュ力が必要なんです」「世界のいろいろな人と触れ合うのはすごく大切なことだし、やりたいと思う。しかし、あまりする機会がないのも事実」などである。これらは意識部分での理解ができたが、実場面で行動が伴うか不安があることを表している。